
鉄の花

白峰 調

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄の花

【Zコード】

Z3396D

【作者名】

白峰 調

【あらすじ】

僕のおじさんは、変わり者の科学者で、ひとりで辺境の星に住んでいた。ある日僕が彼を訪れると、そこには異変が起こっていて…。センチメンタルな短編。

ある高名な科学者が、その地位と名誉を捨てて、鉱物しか存在しない不毛の惑星に移り住んだ。

住人は彼しかい。水も食料もまったく望めない辺鄙へんびな星で暮らすなんて人間は皆無だつた。

そこで彼はある研究に没頭しているとの話だが、詳しく知るものはない。僕にも分からぬ。

人が訪れるのは地球暦で年に一度。五十を過ぎても独り身の伯父が、ただひとり心を許した僕だけだつた。

水と食料とよくわからぬ研究資材を満載した宇宙船で、今年も僕は彼の住まいにやつてきた。

「おじさん、レオンです。開けてください」

辺り一面に灰色の景色が広がっている。それはぞつとするような光景だつた。救いは大気の改造をしてあることくらいだ。

自動機械にコンテナを倉庫へと運ばせておき、僕はおじさんの無愛想な小屋の前で通信をいた。灰色をした長方形のそれは、個人用宇宙船の居住区よりはわずかに広いくらいで、彼はそこで不自由なく暮らしていた。寝るとき以外は帰らないからだ。地下にはずつと広い研究スペースがある。

おじさんはまるで、彼が大好きだつたお話の主人公を真似ているようだと思うことがある。ひとりでこの星に暮らすなんて、僕にはとても考えられない。

「あれ……」

「どうも、おかしい。」

いつもは通信を入れればすぐに扉が開き、出迎えてくれた。嫌な予感がした。緊急の信号をつかい、ロックを解除する。

「おじさん！」

そこには長いこと人が生活した形跡がなかつた。ほこりなんて発

生するはずはないが、ベッドや食器はずつと前に使つたまま放置してあつた。

部屋は外の風景にも似て、命の氣配がなかつた。

「どうしたんだい、おじさん！」

僕は急いで階段を下りて、立ち入つたことのない研究室へと踏み込む。施錠ははされていなかつた。

灰色の、無菌室のようになつた部屋の扉を勢いよく開けた。白衣を着た死体がそこに転がつていた。

「……そんな」

彼はそこでミイラのように干からびていた。

心臓のあたりを掻きむしめたような格好で、灰色の床に仰向けに寝そべつている。

「こんなところで、ひとりで死ぬだなんて」

大好きだつた彼の、そのさびしい死を僕は涙で弔つた。

どれくらい時間が経つただろう。

涙をぬぐい、遺体をどうするか考えていると、白い机の上に奇妙なものが載つているのに気がついた。

「これ、おじさんの？」

それは薔薇だつた。

しかしだだの薔薇ではなく、鉄と思われる金属でできていた。伯父にこんな趣味があつただろうか。

小さな鉄の欠片からのびた一輪の花。それはまるで命があるかのように精巧につくられている。

日誌があつた。

地球時代を愛した彼は、しばしばアナクロな行動を好んだ。白い表紙のそれは薔薇のすぐ隣に置かれていた。

日誌に書かれていたことは僕を驚かせた。

彼の研究は、非生物に生物としての特性を与えることだつた。命をもつ金属の創造、その成功例があの薔薇だと記されている。

しかし、厳密な管理を必要とするあの花に、もはや命はなかつた。
鉄の薔薇は死んでいた。

永遠にしおれないその花、それは鉄くずだらうか。それとも芸術
だらうか。

子供のときの思い出がふつとよみがえつた。

伯父は、小学生になつたばかりの僕に一冊の本を買つてくれた。
『星の王子さま』といつその本は科学者の彼には似つかわしくない
ように思えて、素直にそう伝えると、伯父は苦笑しながら言つた。
「王子さまは、心に一輪の薔薇を咲かせている素敵なお人なんだ。で
も僕は、人間の心に咲いている花を見ることができなかつた。世界
のどこかに花を求めて科学者になつた、そんな気がするんだよ」
そのときの青白い纖細そうな横顔は、ずっと目に焼きついていた。
見ることができないはずだ。

「おじさんは、自分の心に花を咲かせていたんだね」

僕は、机の上の花を手に取ると、そつとおじさんの胸に置いた。
自動機械に彼を運ばせようとして、部屋を出る。
階段に足をかけてそつと振り返る。

「おやすみ、王子さま」

そつづぶやくと、僕は階段をのぼつた。

(後書き)

これは某所で練習のために書いたもので、短く簡潔に、それでSF風味を垣間見てみました。ジャンルはSF?ですが、感想お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3396d/>

鉄の花

2010年12月11日13時45分発行